

A0101-08	<b>根拠の明示されていないマニュアルは事故に繋がる</b>		
本文	マニュアル（作業基準・標準仕様など）を作成または変更する際は、必ずその根拠を文書として残し、変更管理、教育等に活用できるようにしておくこと。		
リスクの種類	機器破損、爆発	関連目次・章節	
理由(何故)	マニュアルに根拠が明示されていないと、長い期間、継続的な作業をしていると、その伝承によって作業を進め、条件が変わった時に正しい作業の基本がわからなくなり、知らない間に事故が発生する恐れがある。		
方策	<p>1) 作業基準・標準仕様には、数値や条件の根拠を明確に文書に記載しておく。</p> <p>2) 作業・運転条件が変更される場合の対応方法を明確にし、日常から教育訓練をしておくこと。</p> <p>また、指示責任者、連絡のやり方も明確にしておくこと。</p>		
事故例	<p>アセトアルデヒドの酸化によって酢酸を製造する設備において、定期点検の際に抜いた反応溶媒の戻しを忘れ、更に早く温度を上げるために反応溶媒を減らして通常量のアセトアルデヒドのフィードを開始した。アルデヒド濃度が通常の 2% に対し 5.5% になり、反応が暴走して爆発した。重要なファクターであるイニシャルチャージ量やアルデヒド濃度がSOPで不明確であり、かつ、その技術上の根拠が使えるようになっていなかったため、長期間の操業で反応原理が忘れられていたことも一因である。（1970.5.15 化学工場）</p> <p>（高圧ガス保安協会「コンビナート事故事例集(H3.4)」）</p>		
法的参考事項			
備考			